

気候系監視速報（2025 年（令和 7 年）3 月）

気候系の特徴（2025 年 3 月）

- ・太平洋赤道域の海面水温偏差は、西から正、負、正の 3 極構造となった。NINO.3 海域の月平均海面水温偏差及び基準値との差は $+0.7^{\circ}\text{C}$ だった。対流活動は、平年と比べて、北インド洋～インドネシア周辺と南米北部付近で活発、太平洋赤道域の西部～中部で不活発だった。
- ・対流活動に対応して、対流圏上層では、太平洋西部・中部で南北半球対の低気圧性循環偏差、インド洋～インドネシア周辺と太平洋東部で南北半球対の高気圧性循環偏差となった。
- ・500hPa 高度では、極渦はカナダ東部、バレンツ海、東シベリアに分裂した。グリーンランド～ヨーロッパ北部周辺で正偏差、北米北部やヨーロッパ南西部で負偏差となった。
- ・日本周辺では、寒帯前線ジェット気流の南への蛇行は弱かった。
- ・海面気圧では、中国東部～本州付近で負偏差となり、日本付近は気圧の谷となった。
- ・日本の平均気温は、北・東・西日本で高かった。降水量は、西日本日本海側で多く、日照時間は、東・西日本太平洋側と西日本日本海側で少なかった。

日本の天候（図 1～3、表 1）

平均気温：北・東・西日本で高かった。

降水量：西日本日本海側で多かった。

日照時間：東・西日本太平洋側と西日本日本海側で少なかった。

天候経過：寒気の影響が弱く、暖かい空気が流れ込んだ時期があったため、月平均気温は北・東・西日本で高かった。また、沖縄・奄美を中心に強い寒気の影響を受けた時期もあり、全国的に 10 日程度の周期で気温が大きく変動した。上旬と中旬は、東日本太平洋側と西日本を中心に低気圧や前線の影響を受けやすく、上旬は北日本は高気圧に覆われやすかった。一方、下旬は北日本日本海側を中心に低気圧の影響を受けやすく、東・西日本と沖縄・奄美では高気圧に覆われやすかった。このため、月降水量は西日本日本海側で多く、月間日照時間は東・西日本太平洋側と西日本日本海側で少なかった。

世界の天候

- ・世界の月平均気温偏差は $+0.56^{\circ}\text{C}$ （速報値）で、1891 年の統計開始以降、3 月として 3 番目に高い値となった。3 月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は約 $0.90^{\circ}\text{C}/100$ 年（速報値）である（図 4）。
- ・主な異常天候発生地域は次のとおり（図 5）。
 - インド南部～パキスタン南部、ヨーロッパ南東部～西アフリカ北部、ブラジル南部、オーストラリア南東部～西部で異常高温となった。
 - 中央シベリア南部及びその周辺、インドネシア西部及びその周辺、地中海西部及びその周辺、ボリビア南部～パラグアイで異常多雨となった。
 - ヨーロッパ北部～中部、ウズベキスタン～トルコで異常少雨となった。

海況（図 6）

- ・太平洋赤道域の海面水温は、東部で顕著な正偏差、日付変更線の西で顕著な負偏差となった。NINO.3 海域の月平均海面水温偏差及び基準値との差はともに $+0.7^{\circ}\text{C}$ だった（図 7）。
- ・北太平洋では、フィリピンの東海上～中部の亜熱帯や中緯度帯の日付変更線付近で顕著な正偏差、カリフォルニアの南西海上では顕著な負偏差となった。
- ・南太平洋では、中緯度帯の西部から中部で顕著な正偏差となった。
- ・インド洋では、インド周辺で顕著な正偏差となった。

- ・北大西洋では、亜熱帯やヨーロッパの西海上で顕著な正偏差となった。
- ・南大西洋では、中緯度帯の西部で顕著な正偏差となった。

熱帯の対流活動と循環

- ・対流活動は、平年と比べて北インド洋～インドネシア周辺、東部太平洋赤道域で活発、西部・中部太平洋赤道域で不活発だった（図 8）。
- ・赤道季節内振動に伴う対流活発な位相は、南米～インド洋～太平洋西部付近を東進した（図 9）。
- ・対流圏上層では、太平洋西部・中部で南北半球対の低気圧性循環偏差、インド洋～インドネシア周辺と太平洋東部で南北半球対の高気圧性循環偏差となった（図 10）。
- ・対流圏下層では、太平洋西部・中部で南北半球対の高気圧性循環偏差、太平洋東部で南北半球対の低気圧性循環偏差となった。
- ・海面気圧は、インド洋～インドネシア周辺で負偏差、太平洋熱帯域で正偏差となった。南方振動指数は+1.1 だった（図 7）。

北半球の循環

- ・500hPa 高度（図 11）より、極渦はカナダ東部、バレンツ海、東シベリアに分裂した。東シベリア海～グリーンランド～ヨーロッパ北部、日本周辺～ハワイの北で正偏差、東シベリア～北米北部で負偏差となった。北大西洋中緯度～中東で波列状の偏差パターンとなり、ヨーロッパ南西部で負偏差、ヨーロッパ南東部で正偏差となった。
- ・200hPa 風速（図 12）より、偏西風は平年と比べて北米で強く、ヨーロッパでは分流した。亜熱帯ジェット気流は東アジアで南寄りを流れた。日本周辺では、寒帯前線ジェット気流の南への蛇行は弱かった。
- ・海面気圧（図 13）より、北米の広い範囲で負偏差となった。中国東部～本州付近でも負偏差となり、日本付近は気圧の谷となった。
- ・850hPa 気温（図 14）は、米国やユーラシア大陸の広い範囲、日本周辺で正偏差、カナダ北部、東シベリアで負偏差となった。
- ・30hPa 高度より、成層圏の極渦はヨーロッパ側にずれ、3/8 に成層圏大規模突然昇温が発生した。

南半球の循環

- ・500hPa 高度は、高緯度で負偏差、中緯度の広い範囲で正偏差となった。
- ・海面気圧は、概ね 500hPa 高度に対応した偏差パターンとなった。

帯状平均場

- ・帯状平均した対流圏の東西風は、北緯 40～60 度帯、南緯 60 度帯で西風偏差、低緯度や南緯 30 度帯で東風偏差となった。北半球の極夜ジェット気流は平年に比べて弱かった。
- ・帯状平均した対流圏の気温は、広い範囲で高温偏差となった。成層圏の高緯度で顕著な高温偏差となった。

北半球の積雪と海水

- ・衛星観測による北半球の積雪日数は、ヨーロッパ東部～中央アジア北部で平年と比べて少なかった。
- ・北極域の海水面積は、3 月としては 1979 年以降で最も少なく、特にバレンツ海で平年と比べて少なかった（[米国雪氷データセンター](#)）。

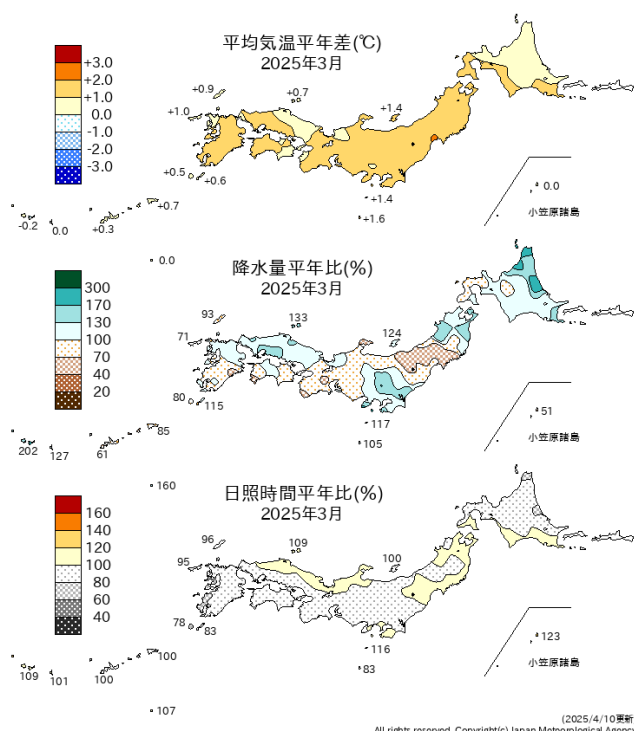


図1 月平均気温、月降水量、月間日照時間の平年差(比)
(2025年3月)
平年値は1991～2020年の平均値。

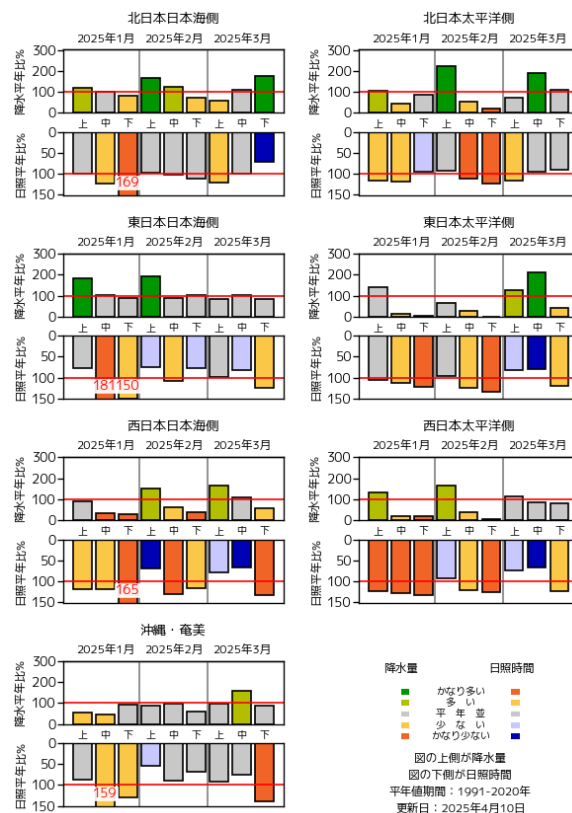


図2 旬降水量及び旬間日照時間地域平均平年比の時系列(2025年1月～2025年3月)
それぞれの上側が降水量(%), 下側が日照時間(%)。
平年値は1991～2020年の平均値。

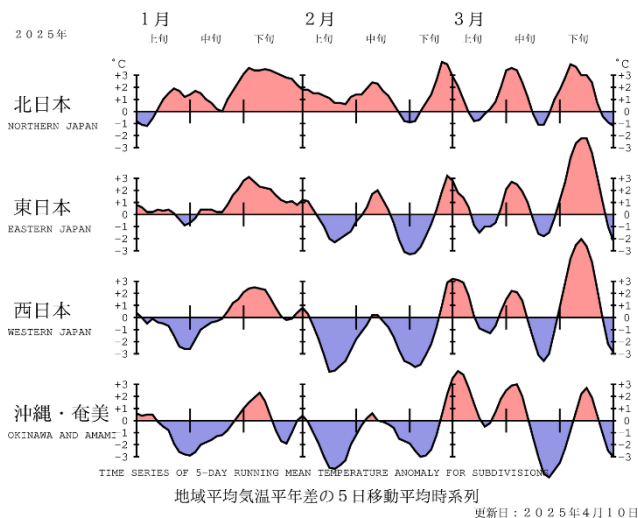


図3 地域平均気温平年差の5日移動平均時系列(2025年1月～2025年3月)
平年値は1991～2020年の平均値。

表1 月平均気温、月降水量、月間日照時間の地域平均平年差(比)(2025年3月)
平年値は1991～2020年の平均値。

地域平均平年差(比)と階級 2025年03月

	気温 平年差 ℃(階級)	降水量 平年比 %(階級)	日照時間 平年比 %(階級)
北日本	+1.3 (+)	113 (0) 日 110 (0) 太 115 (0)	97 (0) 日 93 (0) 太 100 (0)
東日本	+1.3 (+)	109 (0) 日 90 (0) 太 113 (0)	97 (-) 日 103 (0) 太 95 (-)
西日本	+1.0 (+)	100 (0) 日 109 (+) 太 93 (0)	92 (-) 日 95 (-) 太 90 (-)
沖縄・奄美	+0.2 (0)	115 (0)	105 (0)

階級表示

(-) : 低い(少ない)、(0) : 平年並、(+) : 高い(多い)、
(*) : かなり低い(少ない)、かなり高い(多い)を表す。

地域表示

日 : 日本海側、太 : 太平洋側
本文中の北・東・西日本の降水量・日照時間の特徴は、
日本海側・太平洋側の階級に基づいて記述している。

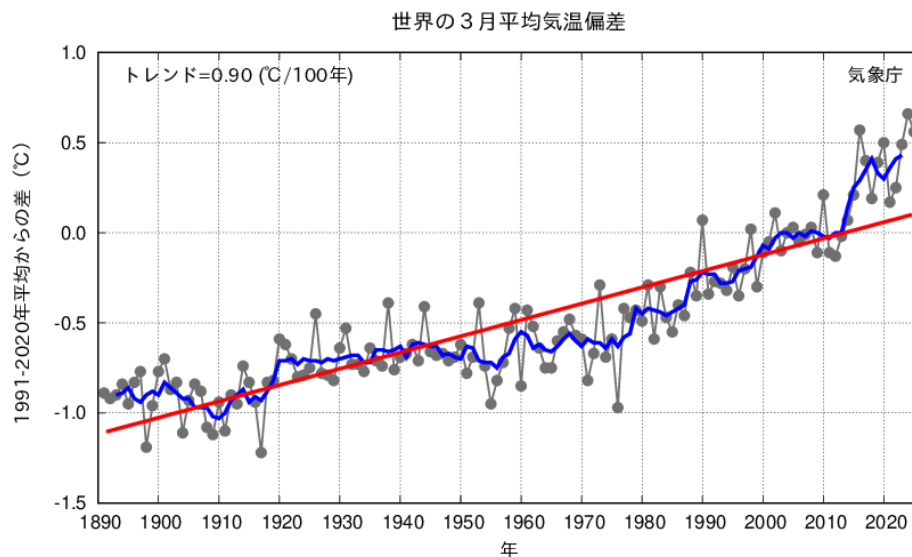


図 4 3 月の世界の月平均気温偏差の経年変化 (1891～2025 年：速報値)

細線 (黒)：各年の平均気温の基準値からの偏差、太線(青)：偏差の 5 年移動平均値、直線(赤)：長期変化傾向。
基準値は 1991～2020 年の平均値。

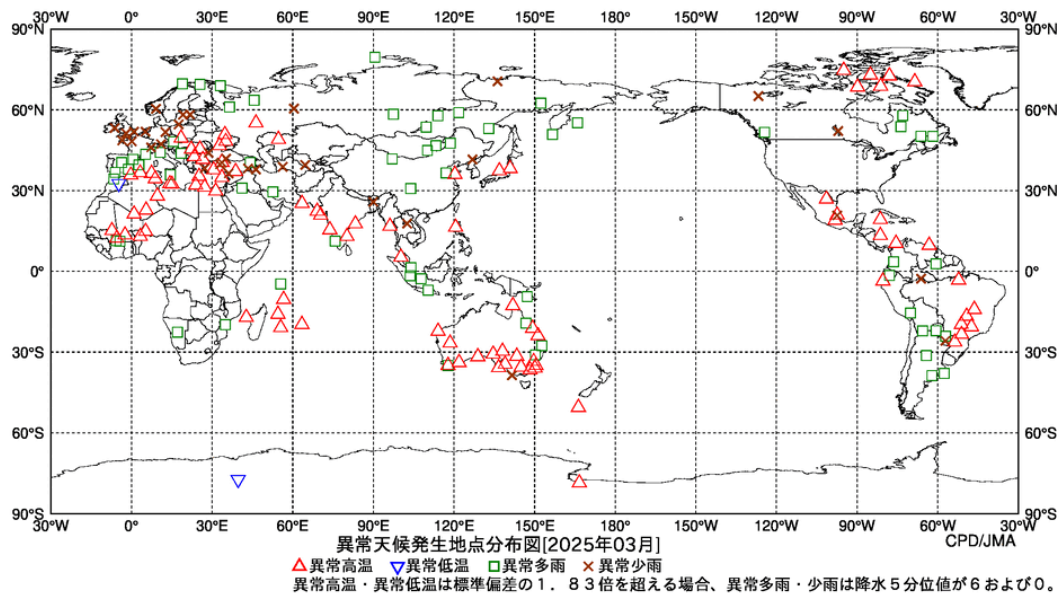


図 5 異常天候発生地点分布図 (2025 年 3 月)

△：異常高温 ▽：異常低温 □：異常多雨 ×：異常少雨

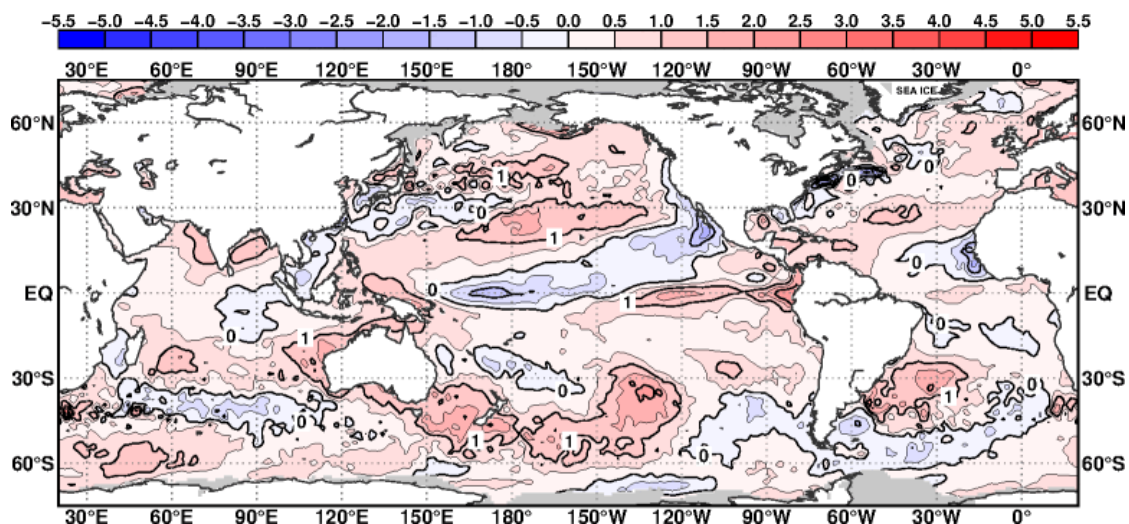


図 6 月平均海面水温年差 (2025 年 3 月)

等値線の間隔は 0.5°C 毎。灰色陰影は海水域を表す。平年値は 1991～2020 年の平均値。

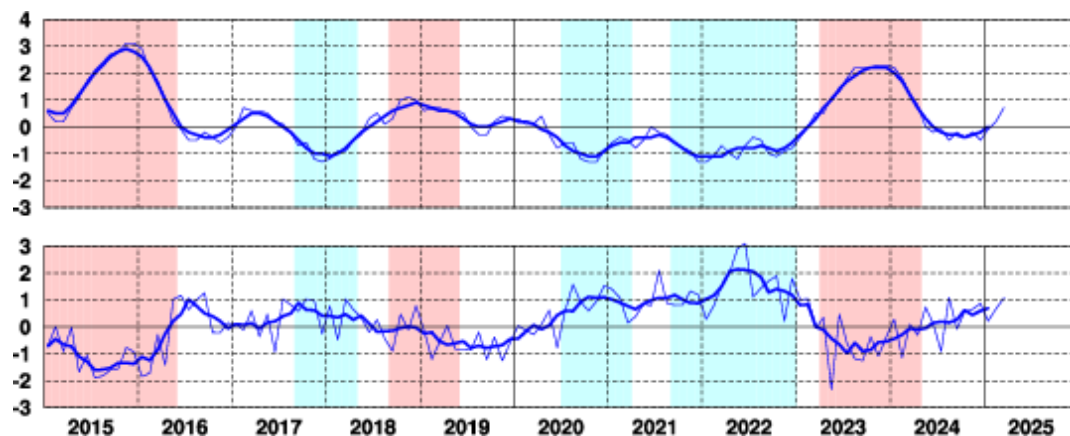


図7 エルニーニョ監視海域の月平均海面水温の基準値との差(°C)(上)と南方振動指数(下)の推移
細線は月平均値、太線は5か月移動平均値を示す(海面水温の基準値はその年の前年までの30年間の各月の平均値、南方振動指数の平年値は1991~2020年の平均値)。赤色の陰影はエルニーニョ現象の発生期間を、青色の陰影はラニーニャ現象の発生期間を示している。

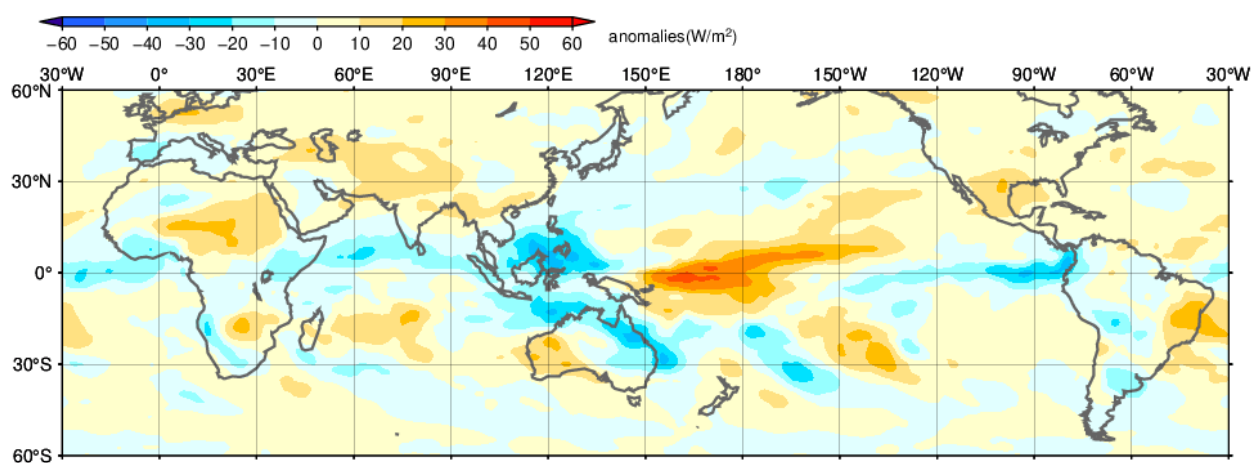


図8 月平均外向き長波放射量(OLR)平年差(2025年3月)
陰影の間隔は 10W/m^2 毎。平年値は1991~2020年の平均値。米国海洋大気庁(NOAA)気候予測センター(CPC)より提供されたBlended OLRを用いて作成。

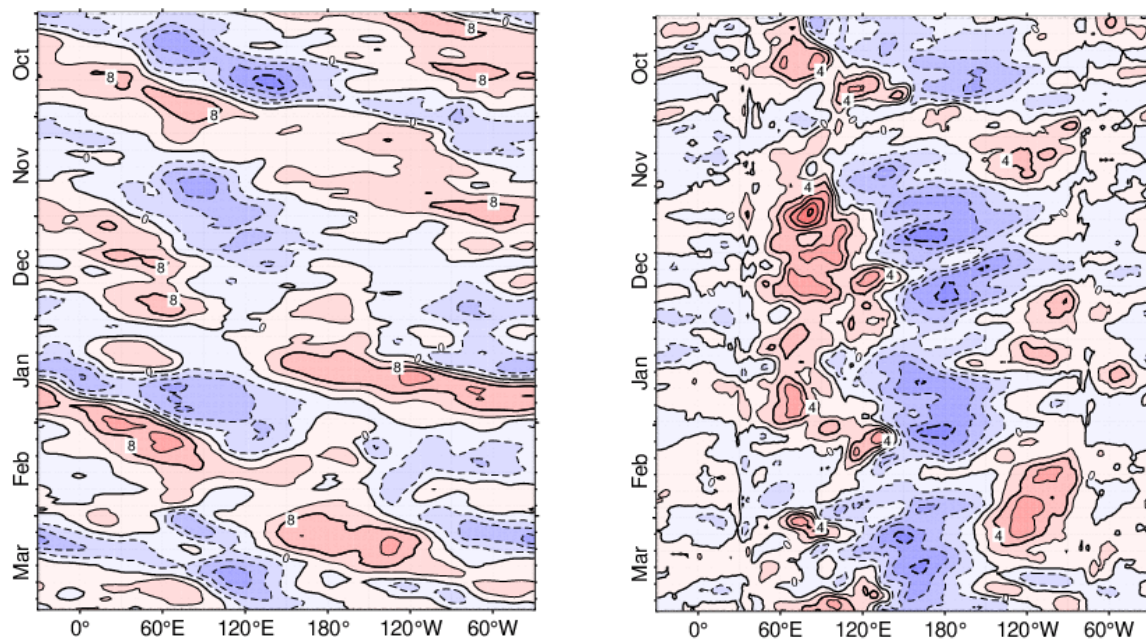


図9 赤道付近($5^{\circ}\text{N}\sim 5^{\circ}\text{S}$)の5日移動平均200hPa速度ポテンシャル平年差(左)、850hPa東西風平年差(右)の時間・経度断面図(2024年10月~2025年3月)
等値線の間隔は、 $4\times 10^6\text{m}^2/\text{s}$ 毎(左)、 2m/s 毎(右)。平年値は1991~2020年の平均値。

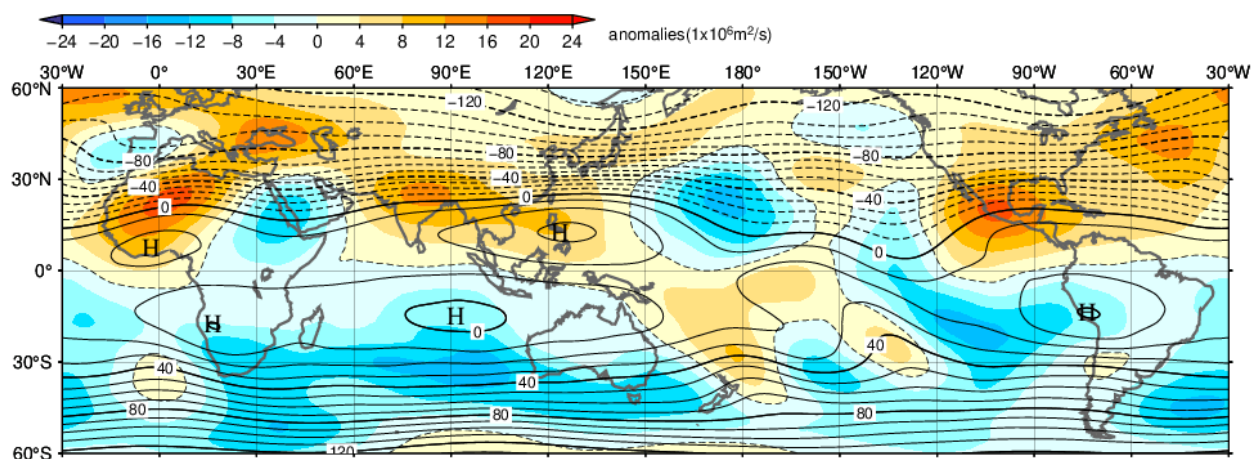


図10 月平均200hPa流線関数・平年差(2025年3月)
等値線の間隔は $10 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$ 毎。陰影は平年差。平年値は1991～2020年の平均値。

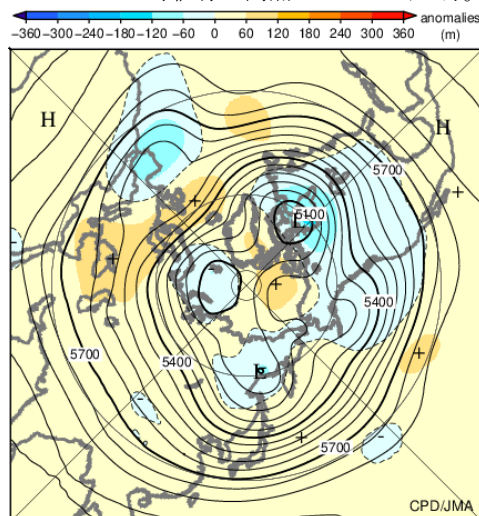


図11 北半球月平均500hPa高度・平年差(2025年3月)
等値線の間隔は60m毎。陰影は平年差。平年値は1991～2020年の平均値。

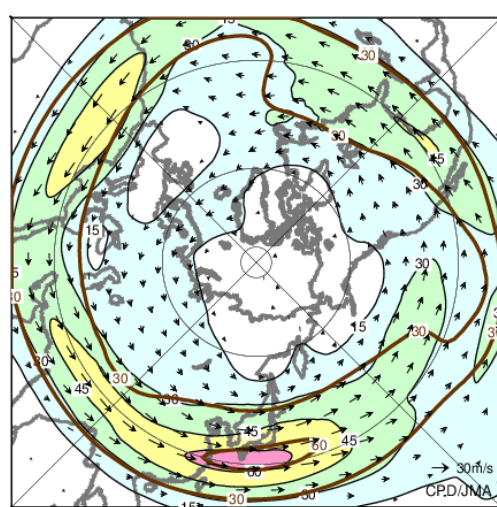


図12 北半球月平均200hPa風速・風ベクトル(2025年3月)
等値線の間隔は15m/s毎。平年の30m/s毎の等値線を茶色で表す。平年値は1991～2020年の平均値。

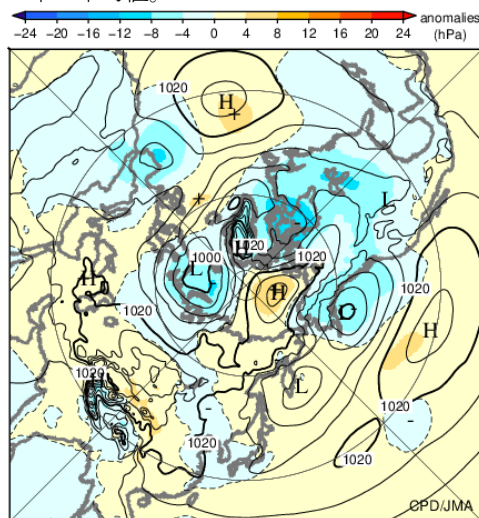


図13 北半球月平均海面気圧・平年差(2025年3月)
等値線の間隔は4hPa毎。陰影は平年差。平年値は1991～2020年の平均値。

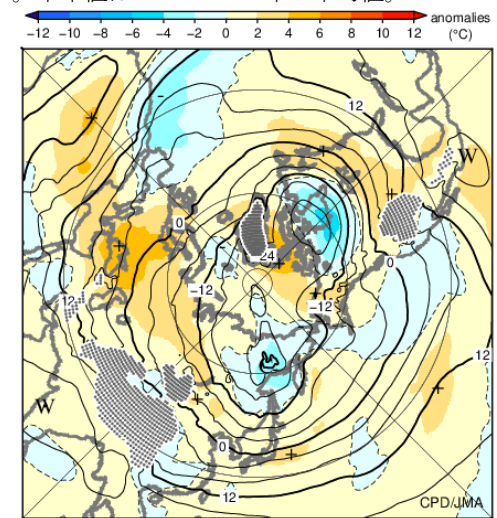


図14 北半球月平均850hPa気温・平年差(2025年3月)
等値線の間隔は4°C毎。陰影は平年差。平年値は1991～2020年の平均値。

気候系に関する詳細な情報は、気象庁ホームページ内「気候変動ポータル」の「最近の気候と海洋に関する情報」の各項目に掲載しています。気象庁ホームページ内の「気候変動ポータル」のURLは次の通りです。

<https://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/menu/index.html>

本件に関する問い合わせ先：気象庁 大気海洋部 気候情報課



【気候変動ポータル】